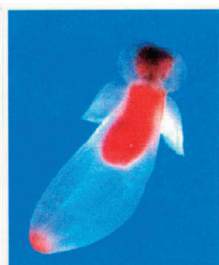


Steel 鉄の点景 Landscape.



極寒の中にそびえる鉄 ～北海道～



流水の下を舞う、海の天使
「クリオネ・リマキナ」。

北海道の紋別市に、平成8年2月、
流氷観測施設「オホーツクタワー」が完成した。
春から秋、時には吹き荒ぶ潮風と荒波を受け、
そして、冬には押し寄せる
流氷の圧力が襲いかかる。
一年を通じて、想像を絶する環境と戦う鉄の姿が、
さいはての地に、あった。



オホーツクタワー全景

し、厳しい気候に一変する。

流水によって海が閉ざされると同時に、港湾活動や漁業は停止し、すべての船舶は陸へ上架、もしくは他港へ回航する。

そして、オホーツクの豊かな水産資源を生活の中心にしていた人口約30,000人の街は、流水の到来とともににぎやかな観光の街へと変貌する。

流水の観察と研究の拠点、オホーツクタワー

今までは、流水がやってくると、人々は海から隔絶された生活を送るしか術がなかった。

ところが、長年にわたる経験や観測などから、流水は漁や天候と密接に関わっていることが、徐々にわかってきた。

そうになると、さらに深い研究や観察を続けていけば、この人の手を阻む流水は、逆にさまざまな恩恵をもたらす有益な自然現象として利用価値が生まれてくる。

その観測の中心基地として昨年2月に完成したのが「オホーツクタワー」である。

1986年、科学技術庁によるアクアマリン計画において紋別市が提案したオホーツクにおける技術計画が採択され、タワーを中心に氷海海洋科学技術の観測、実験を行うシステムの開発が始められた。

このプロジェクトを実現するために、紋別市はタワーに先駆けて、この地域一帯をガリヤ地区と名付け、流水科学センター「ギザ」、真冬でも泳げる「ステア」を完成させた。

単なる観測施設だけでなく、防波堤や人工海水浴場、アザラシの飼育施設など、観光目的をも含めて今後も整備されていく予定である。

先端技術を満載したフロア

タワーは防波堤から40m沖合の水深8.9mの位置に建設され、防波堤とは渡海橋によって、接続している。

海中部は鉄筋コンクリート構造で、流水の圧力などを受ける海面付近は鋼とコンクリートのハイブリッド構造となっている。また、この部分には防食対策としてチタ

水産と観光の共存できる街へ

日本最北端の宗谷岬と知床岬のちょうど中間に位置する紋別市は、オホーツク海と真正面に向き合った、いわずと知れた流水の街である。

気候は比較的穏やかで、晴天率も全国のトップクラスの地域であるが、毎年1月から3月にかけてやって来る流水とともに、平均気温は時によって一気に10度以上も低下

シムラッド鋼によるライニング工法も採用された。

地上、いや水上3F、水面下1Fの4階構造で、訪れる人が全身で流水を体感できるように配慮されている。

最上部の3Fは、知床連山と見渡す限りのオホーツク海を一望できるパノラマ展望室。

2Fは海洋科学の最先端を披露するフロアで、流水のレーダー画像、温度分布カメラなどの気象、海象観察画像がリアルタイムで表示される。

1Fは渡海橋からのエントランスホール。タワーが建設されるまでの記録映像などが見られる展示ホールでは、ときには流水の写真や絵画展なども開催される。

そして圧巻なのが、流水を海の底から観察できる海底階。観察窓からは四季を通じてオホーツクのさまざまな魚が泳ぐ姿が見え隠れし、冬場には、海面に広大に広がるダイナミックな流水の裏側を眺められる。天井にライトアップされたルミライトアートの美しい流水の映像は、ほんとうに流水の底でダイビングしているような錯覚に陥る。

それぞれのフロアごとに、観察テーマが絞り込んでレイアウトされているので、4階層を通じてオホーツクの海が立体的に感じられる。

恵みは流水とともに

最先端の技術を導入しての観察や研究により、流水はたくさんのプランクトンを育てていることや、さまざまな気象情報をもたらしてくれることがわかってきた。

「北の海」「流水」と聞くと、鉛色の凍てつく風景ばかりを想像しがちだが、人間界と自然とのあいだに幕を引くかのようなこの流水は、豊饒な海の恵みと情報をたたえた、北の海からのプレゼントなのである。

流水の観察はオホーツクタワーがベースとなることによって、今後もさらなる有益な恵みへとつながっていくことだろう。

[取材協力・写真提供：株式会社オホーツク流水科学研究所]



3F／パノラマ展望台



2F／科学技術プレゼンテーションフロア



1F／エントランスホール



海底階/水中観察フロア



流水に照明がひとときを映える夜のオホーツクタワー